

# 台湾神宮の消長と地下神殿の諸相

津田 良樹

## はじめに

台湾神社は台湾の総鎮守として、台北市の北部（現在の圓山大飯店の地）に、明治34年10月27日に鎮座した官幣大社である。昭和10年代になって、昭和造替・遷座の計画が持ち上がり、昭和19年には新社殿が造営されたが、遷座直前に航空機事故により焼失するなどの経緯をたどり、敗戦とともに廃絶される。これらの経緯について先の論文で検討した<sup>(1)</sup>。しかし、新たに判明したことを含め、追加や訂正すべきこともあり、戦後の変容についての検討を加えて再構成する。また、神社に付随する地下神殿についても新たな事例も加え報告する。

## 昭和造替から廃絶へ

台湾神社の昭和造替計画は、昭和10年7月に台湾総督府において造替・境内拡張の方針が内部決定され、準備調査が始まっている<sup>(2)</sup>。総督府の御用新聞である『台湾日日新報』などでは報道されておらず、台湾においては一般に公表されなかったようである。しかし、内地の『大阪時事新報』の昭和10年10月10日付には以下のように報道されている。報道によると、台湾神社社殿の経年による損傷と境内地の狹隘を理由に皇紀2600年記念事業として総工費約200万円を投じ、昭和12年から4箇年継続事業として、社殿の大改築を行い、改築を期に社号を台湾神宮に改称し、天照大神と明治天皇を増祀するようであるとされている。関係者が後に明かす、昭和10年7月には内部決定されていたことが裏付けられる<sup>(3)</sup>。すなわち、皇紀2600年記念事業として昭和12年から15年までの4年間の継続事業で、昭和15年

11月の式典にあわせて社殿を大改築し、社号を神宮に改称するとともに天照大神・明治天皇を増祀する計画であった。しかし、神社の位置を巡って旧地での改築か、移転して遷座改築なのかを巡る軋轢や遷座地裏山の地滑り対策などにより工事は遅れに遅れ、ほぼ完成したのは4年遅れの昭和19年のことであった。その上、遷座直前の19年10月23日に航空機墜落事故によって新社殿が大破する。それに先立つこと6月17日には社号を神宮に改称するとともに天照大神を増祀することが公表される<sup>(4)</sup>。しかし、予定していた明治天皇の増祀は行われなかった<sup>(6)</sup>。

航空機墜落事故の翌々日の10月25日に旧来の台湾神社（神宮）で増祀祭が行われた。その様子は台湾報道写真協会編輯の「台湾神宮増祀祭」で確認することができる<sup>(7)</sup>。同書には「本島の総鎮守台湾神宮に皇祖天照大神を御祭神の首座へ御増祀申上げる曠古の祭典は勅使の参向を仰ぎ奉り劍潭の森に爽秋漸く深まる十月二十五日午後五時からいとも厳かに行われた」とある。また、旧来の神社（神宮）地で行われた増祀祭の様子を写す写真が収録されている。図1には御滞在所を出る霊代と勅使が写されている。図2には祭典に参列する来賓が居並ぶ吹き放ちの拝殿とその奥に祝詞舎・本殿にのぼる石段などが写っている。また、図3には拝殿に至る長い石段を登る参拝者や石段上の鳥居や石燈籠などが写されている。これらの写真から見て旧来の社殿において増祀祭が行われたことが明らかである。

台湾石材株式会社<sup>(8)</sup>の昭和20年1月に出された『第三十七回営業報告書』によると「十月ニハ台湾神宮新社殿炎上ノ不幸アリ同請負工事モ一時中止打切ト決定セラルル」とあり、新社殿炎上に伴い工事は一時中止そして打ち切りになったことが判明する<sup>(8)</sup>。



図1 「勅使参向」(台湾報道写真協会編輯、「台湾神宮増祀祭」所収)  
御滞在所から社殿へ向かう勅使。



図3 「神宮に参拝する 海のつわもの達」  
(台湾報道写真協会編輯、「台湾神宮増祀祭」所収)  
拝殿に至る石段を登る参拝者。



図2 「荘厳の気満つる増祀祭」(台湾報道写真協会編輯、「台湾神宮増祀祭」所収)  
吹き放ちの拝殿に居並ぶ参列者。奥に本殿に至る石段が見える。

「昭和二十年五月中、台湾空襲状況集計、台湾総督府警務局防空課」によると台湾神宮の5月5日の被害状況として「神楽殿、社務所、神饌所各小破、拝殿屋根小破、石燈籠四基倒壊」とされる<sup>(9)</sup>。また、朝日新聞の昭和20年5月8日付によると「六日未明、敵米機台湾神社に投弾、拝殿の一部を焼失本殿は安泰」とある<sup>(10)</sup>。これらは、同一の被害を記すと考えられる。新社殿予定地では神楽殿は3期工事で造られる予定であったが、延期され結局造られていない。この点から判断すればこの台湾神宮は旧来の台湾神社社殿である。すなわち、昭和20年5月5日当時の台湾神宮は旧来の台湾神社(神宮)であり、その社殿が空襲を受けたことがわかる。その後、昭和20年11月に台湾神宮が正式に廃止されるまでの6箇月ほどの間に<sup>(11)</sup>、遷座したとの記録は管見の限り見当たら

ない。これらから判断して、予定された新社殿へ遷宮はなされることはなく、新社殿予定地は一度も正規の台湾神社(神宮)になることはなかったとみてよかろう。すなわち、台湾神社は台湾神宮に改称されたが、社殿および境内地は旧来の地のままで継続され、昭和20年11月にその地で廃止されるに至ったのである。

## 敗戦前後の台湾神社(神宮)の様相

戦後、台湾神社(神宮)は、台湾省政府交通処所管の台湾旅行社によって台湾大飯店となった。それに伴い1949年に着工し、51年にはホテル用と思われる2階建の中国式の建物が建てられた。その後、1952年5月9日に経営権が財団法人台湾省敦睦聯誼会の圓山大飯店に移ったようだ。それが現在の圓山大飯店の前身である<sup>(12)</sup>。1953年には圓山大飯店にプール・テニスコートおよび会員廳が建設された<sup>(13)</sup>とされている。プール・テニスコートは後に詳述するが、旧来の台湾神社社殿地に造られた。一方、会員廳は現在も会員廳がある新社殿予定地に造られたのではないかと思われる。しかし、敗戦から1953年までの間の新社殿予定地の状況はまったく不明であ

る。戦後の台湾の文献に当たれば判明すると思われるが、現時点では確認できていない。そこで、戦後の変容過程を写真・地形図・航空写真によって以下に検討してみる。

戦後の変遷を検討するに先立ち、敗戦前後の旧来の台湾神社（神宮）および新社殿予定地の様子をまず確認しておきたい。台湾の総鎮守であり官幣大社であった台湾神社（神宮）ではあるが、全貌を示す資料は意外と少ない。

敗戦期の状況をつぶさに見せるのが、1945年版空中写真である<sup>(14)</sup>。とはいえモノクロで鮮明度に欠けており空中写真からだけで様相を判断することは難しく、神社時代の古写真・古絵図・図面などをあわせて判断しなければならない。

### 旧来の台湾神社（神宮）の様相

『官幣大社台湾神社境内之図』<sup>(15)</sup>などから確認できるように、台湾神社（神宮）の境内に社殿群が配されていた主要部は、本殿・祝詞舎などがあった上段、拝殿などがあった中段、御滞在所・社務所・神楽殿などのあった下段の3段構成になっていた。そして、上段・中段境、中段・下段境は急な法面があり、それらは長い石段で上下段を繋いでいた。中段・下段を繋ぐ石段上に三之鳥居が建ち、下段の神饌所や滞在所・社務所建ち並ぶ後方部分と、それよりわずかに2、3段下がる前方部分を分けて二之鳥居、さらに前方部分の全体の入口に当たる部分に一之鳥居が建てられていた。

社殿群を上段から確認していくと、上段中央に本殿があり、本殿を瑞垣で取り囲み、瑞垣正面に祝詞舎・背面に瑞垣裏門を開く。瑞垣で囲まれた中心施設の東後方に神庫がある。さらに、全体を囲むように玉垣を巡らせていたようで、正面は長い石段で中段に繋げている。

中段は、中央部やや後方よりに拝殿があり、背面側の法面を除く3方に玉垣を巡らせ、正面に三之鳥居を開く。三之鳥居前には長い石段で下段に繋げている。石段下両側には大きな燈籠が置かれている。

下段は、三之鳥居下の石段から下段を前後に分ける二之鳥居、さらに全体の入口に当たる一之鳥居を

石敷きの参道で繋いでいる。下段後方部分は参道東側の奥に神庫があり、唐破風を付けた玄関を持つ御滞在所さらに軒を連ねて社務所が配されている。一方、西側には奥に神饌所があり、御滞在所に正対して唐破風を付けた神楽殿らしき建物がある<sup>(16)</sup>。下段後方部分は、正面および西側を荒垣で、東側の建物群の背後を煉瓦垣で囲んでいたようだ。正面の荒垣には二之鳥居を開いている。

荒垣と二之鳥居で区切られ、2、3段下がった下段前方部分は参道西側の一之鳥居近くに手水舎らしき建物が確認できるのみで、そのほかの部分は両側とも広場になっているようだ。なお、東側の荒垣外には荒垣に沿って細長い休憩所がある。

一之鳥居の前方両側には一対の大燈籠があり、西側には制札場がある。さらに東寄りには大きな参集殿らしき建物も確認できる。下段を貫く参道両脇には石燈籠が並んでいるほか、一之鳥居前方の参道両脇にも石燈籠が林立している様子が確認できる。以上のような様相が敗戦前後頃の旧来の台湾神社（神宮）の様相である。

### 新社殿予定地の様相

新社殿予定地に建てられた社殿群は、昭和19年10月23日に大破する直前の段階で、造営計画配置図（図4）の網掛けした建物を除く建物群であったと思われる。ただ、本殿の背後あたりは若干異なっていたようだ。それは背面が傾斜法面のためだと思われる。造営計画配置図では本殿の後方の神庫・羽車舎の背後を透塀で囲っている。しかし、現実には神庫・羽車舎の背後は擁壁がせまり、さらに擁壁上も法面となっている。そのため、透塀の延長線上の東西および背面に筋塀等を建てていた。東西の筋塀は今も現存している。なお、本殿・拝殿や回廊からなる主要社殿群は背面の地滑りの恐れから、社務所と参集所（未完成）の前面を結ぶ直線を延長した線上まで、南にそれぞれに平行移動させた位置に建てられていたと思われる。また、手水舎は計画されていた回廊に接続して造られるのではなく、独立して造られたようである<sup>(18)</sup>。社殿造営の基本方針を「様式を流造りとし、本殿に千木、勝男木を附すこと、社



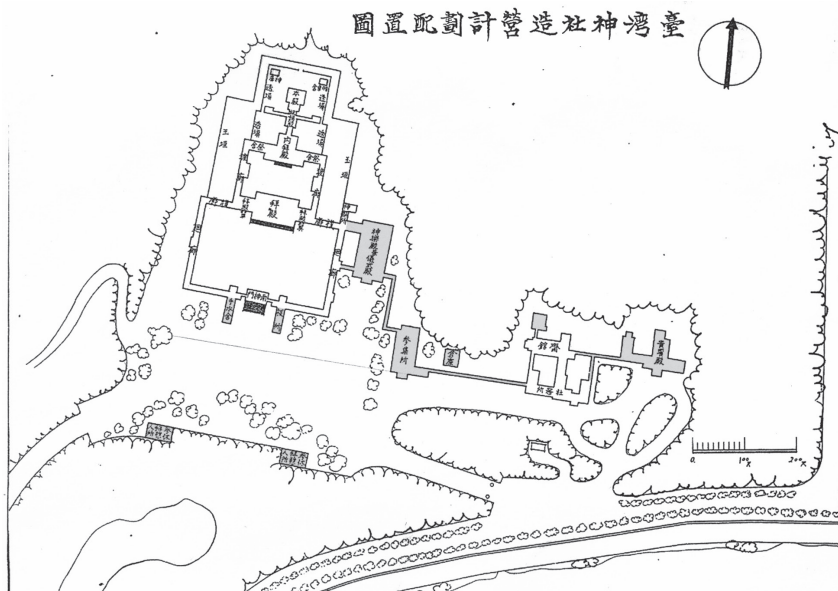


図4 台湾神社造営計画配置図（『台湾神社御造営奉賛会趣意書 会則附役員名簿』所収）  
網掛の建物は未実施、それらを除く建物は完成したようだ。なお、社務所と参集所の  
前面を結ぶ直線を延長した線上まで、南にそれぞれに平行移動させた位置に建てら  
れていたと思われる。

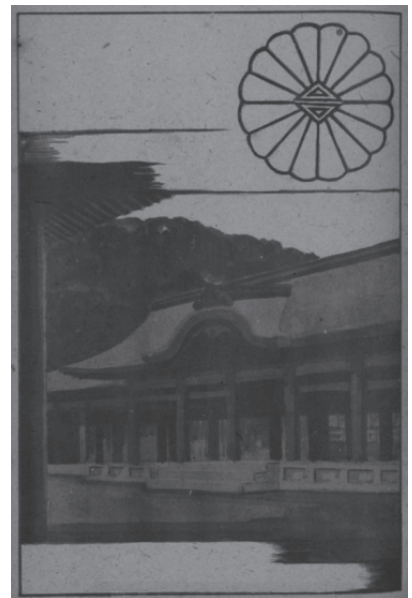


図5 予定地に建てられた拝殿（緒方武蔵、『要塞台湾の全貌』、台湾出版文化株式会社、昭和19年8月）  
焼失前の様子を示す貴重な写真である。拝殿は吹き放ちで、正面屋根を唐破風で飾っていたようだ。

殿はすべて台湾産檜材を用ひ、素木造りとする」とし、社殿建築様式を「鎌倉時代和様を骨子とする流造り」としている。また、旧来の神明造と異なり、「曲線が多く、屋根は緩やかに反転し、要所には抖拱や飾彫刻を備えてやや賑やかになってきた」というように曲線を多用した純日本風の優美な意匠であったようだ。

主要社殿群は、大きく4区画に区切られた外部空間の連なりからなっていた。すなわち、①本殿・神庫・羽車舎を正面側中央に祝詞殿・左右に神饌廊を置き残る3方を透塀で取り巻く一郭、②祝詞殿・左右神饌廊とそれに相對する内拝殿・左右祭舎とを東西に繋ぐ透塀で囲む一郭、③内拝殿・左右祭舎とそれに相對する拝殿・拝殿左右翼とを東西に繋ぐ渡廊で囲む一郭、④拝殿・拝殿左右翼とそれに相對する南神門を大きく回廊で繋いで中庭とする一郭で構成されている。本殿は桧皮葺の流造、内拝殿は切妻造桧皮葺の妻入で左右に祭舎が付き、本殿・内拝殿間に祝詞殿を配している。拝殿は大きな入母屋造桧皮葺の平入りで左右に翼を付け、渡廊で内拝殿と繋ぎ、口の字に中庭を形作っている。また、拝殿前にも回廊を回した口の字の大きな中庭があり、回廊の東西および正面に神門を開く。正面（南）の神門は

楼門で全体の主要な出入口であった。

本殿・祝詞舎・内拝殿・拝殿・渡廊などは桧皮葺で造営されており、第2期工事の南神門や回廊が柿葺となったとしても、主要な社殿群を渡廊や回廊で繋ぐ様は寝殿造風であったのではないと思われる。担当した大倉三郎自らが、「純日本建築美を伝える実に最後の機会と云ふも過言ではない」、「本島天恵の偉容を永く後代に保存し得る唯一の博物館となったのである」と語るような建物群が一時は出来上がったのである。その拝殿前の様子を示す写真が図5である。

にもかかわらず、昭和19年10月23日の夕刻、南神門に航空機が接触して社殿群は大破してしまったのである。大破後の様子は1945年版空中写真によって判明する。内拝殿の南半分は梁が剥き出しになっているが、それ以北の内拝殿の北半分・左右祭舎・祝詞舎・左右神饌廊・本殿・神庫・羽車舎・透塀や東祭舎から南にのびる渡廊・袖廊・回廊は残っていたようだ。それ以外の主要社殿群は壊滅している。一方、主要社殿群と離れて建っていた社務所・斎館は無傷で残っているようだ。また、大小ふたつの鳥居も残っていた。

## 戦後の台湾神宮跡地の変容

1952年の様子を写す図6は一之鳥居外より下段から中段を写した写真である。一之鳥居は健在で、ホテルの門代りに使用されているようだ。その鳥居のすぐ内側には建物が見えず、空き地のように見えるが、元の敷石の参道に立つ人物の服装はテニスウェア姿でラケットを持っており、旧参道両側はテニスコートに改変されているのではないかと判断される。空き地より1、2段高くなっていたその奥との境界に建っていた二之鳥居はなくなっており、玉垣は塀に取って代わられている。塀の内側には左右に唐破風付の建物が写っており、右の唐破風は御滞在所であり、左の唐破風は神楽殿であるようだ。さらにその奥にはかつて拝殿が建っていた中段に登る石段が残っており、中段には左右対称で中央に出入口を設けた中国風の2階建瓦葺のホテルらしい建物が造られている。

同時期の様子を鳥瞰的に写した図7によると下段には一之鳥居ばかりでなく、制札場や左右の大燈籠も確認できる。鳥居内側はテニスのクレーコートで、塀を隔てたさらに内側には御滞在所・社務所・神楽殿ばかりでなく神饌所も残っているようだ。中段には左右対称形で中央にエントランスを取り、両翼を斜めに突き出すように配した2階建の建物がある。



図6 「1952年、圓山大飯店第一代牌楼」と説明がある写真



図7 圓山大飯店鳥瞰写真

る。さらにその背後には2階建て建物に並行するように入母屋屋根の建物が2列配されているように見える。また2列の入母屋屋根の建物の、左後方には独立した瓦屋根の建物が4棟ほどずつ2列に並び、右側にも大きな入母屋屋根などの建物群が建っているようだ。

中段から下段を写したと思われる図8によると、中央部にプールが造られている様子がよくわかる。手前中央に南国らしい椰子の木が植えられ、中央奥に一之鳥居があり、その左右には大燈籠も確認できる。また、プールから元の一之鳥居に続く石敷きの



図8 圓山大飯店、中段から下段を写す



参道が残っているようで、プール手前にも一部敷石が残っているようにも見える。プール右側、すなわち西側奥には唐破風付きの建物があり、これは神楽殿であろう。一方左側にも唐破風が見えており、これは御滞在所であろう。以上のように、この時期までは下段には神社時代の建物や施設が残存していた

ようだ。

1958年版の空中写真によると、先に見た写真とほぼ同様な様子を確認することができる。中段に建てられた2階建の中国風の建物はほぼ元の拝殿の位置に建てられており、その背後には法面があり、石段も残っているようだ。上段には入母屋造の細長い建



図9 1945年版空中写真  
左寄りの「し」の字に見えるものが台湾神宮、中央左寄りが大破後の予定地、右端が台湾護国神社。



図10 1958年版空中写真  
左より、台湾神宮跡、予定地跡。右端が台湾護国神社跡。



物が並列に2列建てられている。そして、奥側の建物のエントランスであろう突出部分あたりが元の本殿位置である。

新社殿予定地の様相について見ると、元の内拝殿と拝殿をロの字に繋ぐ回廊の東西回廊を北に延長し、元の内拝殿や左右祭舎位置にまで延ばして、ほぼ正方形に取り囲む結界が造られている。正方形に



図 11 台湾神宮予定地の 1945 年版空中写真

区切られた結界の中に元の内拝殿位置から元の内拝殿前に至る大きな切妻屋根の会員廳らしき建物ができている。会員廳の前は現在プールとなっているが、1958年には庭園だったようである。また、元の本殿あたりには建物はなく、神庫・羽車舎もなくなっている。代わって元の本殿の東西位置にそれぞれ切妻造の南北棟の建物が建っているようだ。一方、主要



図 12 台湾神宮予定地の 1958 年版空中写真



図 13 台湾神社（神宮）の 1945 年版空中写真



図 14 台湾神社（神宮）跡地の 1958 年版空中写真

社殿群とは少し離れた位置に建てられ、航空機事故の被害からも免れていた社務所・斎館は変わりなく存続しているようだ。

その後、従来からの台湾神社（神宮）境内地には1973年に14階建の中国宮殿式大慶が落成し、大きく変貌を遂げる<sup>(22)</sup>。同年の空中写真によると、14階建建物は元の中段一杯に建てられていることが確認できる。

一方、神宮予定地は同じ空中写真によれば、それまであった会員廳ではないかと思われる大きな切妻屋根の建物はなくなっており、わずかに元の本殿付近に陸屋根の鉄筋コンクリート造の建物らしいものなどが確認できるのみである。会員廳の建て替え期の様相を示しているのかもしれない。現在建っている黄色い屋根瓦の方形屋根建物、その東側の黄色い屋根瓦の切妻屋根建物が確認できるのは1980年版の地形図からである。正確な建築年代は不明だが、既に建っていた陸屋根の建物などを含め、ほぼ現状の建物構成となり、プールなども出来上がった状況がこの時点で確認できる。

1995年には14階建大慶が屋根改修工事中に火災となり、12階以上が焼失する事故が発生する。それでも1998年には修復が終わり、再び14階建大慶での営業が開始され現在に至っている。

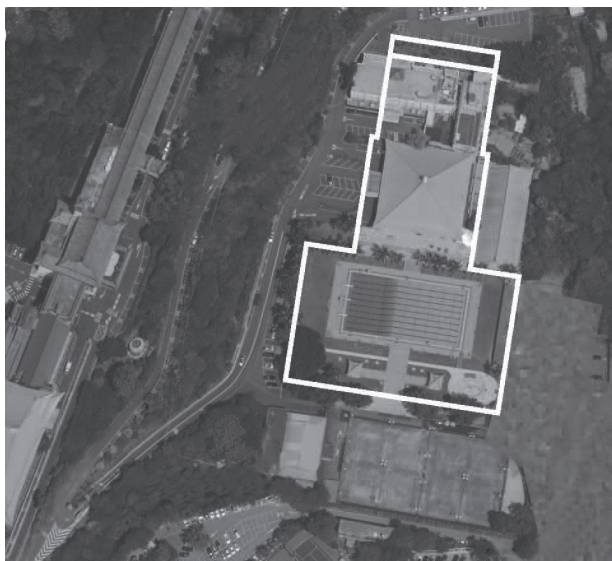


図15 台湾神宮予定地付近の2012年度版空中写真  
大破する前の社殿群を外郭線で示している。北辺の長方形の東西辺が現存する筋塀に当たる。なお、基準とする西筋塀を判読できることから2012年版の空中写真を利用した。また、写真の右下部分のマスキングは台北市都市發展局が施したもの。

一方、大きく変貌した台湾神宮予定地の現状から、残存する筋塀などの遺構を基準に、空中写真・地形図を時系列にたどっていくと、予定地に一時期造営された幻の新社殿位置が明らかとなる。2012年版空中写真に主要社殿群の外郭を仮に書き入れると図15のようになろう<sup>(23)</sup>。現在の建物位置や高低差などに、消滅した社殿群が土に刻まれた歴史として、色濃く残っていると見えよう。

## 台湾神宮予定地の地下神殿

現状調査により確認できたことであるが、元の予定本殿の後ろに配された神庫・羽車舎背後の擁壁面に、計画図などにはなく、「台湾神宮御造営」などでもまったく触れられてない地下施設が造られていた。その様子は図16に示すとおりである。擁壁となる石崖面の2箇所には出入口を設け、コの字に掘られたトンネル状の地下施設となっている。東側の屈曲部に簡易な扉が後補されているが、本来は左右対



図16 台湾神宮予定地の地下神殿  
石崖に口を開いた出入口。その向こうに筋塀が一部見えている。



図17 台湾神宮予定地の地下神殿内部



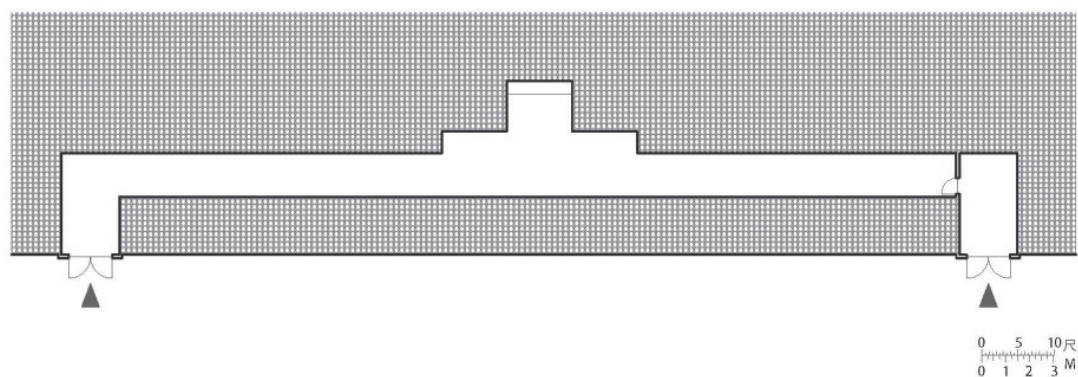


図18 台湾神宮予定地の地下神殿平面図

称の平面である。ちょうど本殿の真後ろに当たる中央最奥部の位置に祭壇状のニッチが造られている。現在ホテルの書類置場となり荒廃しているが、当初は漆喰で壁天井を塗りまわした格式高い空間であったと思われる。ふたつある出入口も上部を切妻の反り破風で飾り、鉄板の扉も厳しい。必ずしも用途は明らかではないが、以上のような点を総合すれば、御神体を格納する施設と見て無理はない。文献上にはまったく出てこないが、緊急時には御神体などを避難させる地下特別神殿ではないかと考えられる。

同様な地下神殿と思しき施設は台湾神宮だけでなく、他の海外神社でも確認することができる。

台湾においては新化神社がある。新化神社は新化街の東方3.3キロメートルほどの虎頭埤風景区にあった神社である。天照大神・北白川能久親王を祭神として、昭和4年6月16日に鎮座した<sup>(24)</sup>。その後、昭和17年11月8日には設計者である台湾神社造営局の小川技手などが参加して、本格的社殿造営の着手となる木造始祭が行われ、同日完成した神橋の渡橋



図19 新化神社の地下神殿

崖面に口を開く。現在建具は失われ開放となっているが、当然神社時代には扉がついていたはずである。

祭も行われている<sup>(25)</sup>。さらに、豊受大神、明治天皇を増祀し、日時は明確ではないが、昭和18年以降に第2期の鎮座が行われている<sup>(26)</sup>。それらの点は第1期、第2期の遺構が確認できる点からも裏付けられる。そのような沿革を持つ新化神社であるが、社務所跡地の地下の石崖面に開口部を設け、上下を階段で結ぶ地下施設が残っている。間口27尺、奥行10尺ほどである。内部は天井や壁面を漆喰で塗りまわすなどの仕上げが施されていたが、現状は剥落が甚だしい。石崖面に開けられた開口部の造作などの詳細は不明であるが、コンクリートで造られた庇やその庇を支える持ち送りに刻まれた渦形などは極めて日本的デザインである。地下遺構は、新化神社第2期に当たる増祀・移転改築のための工事が行われた昭和18年頃に造られたものと判断される。この地下施設の用途は御神体を避難させる防空壕ないしは地下神殿ではないかと思われる。

同様な施設は大陸においても確認されている。ひとつは旧満洲国建国神廟で確認できる事例である。



図20 新化神社の地下神殿内部

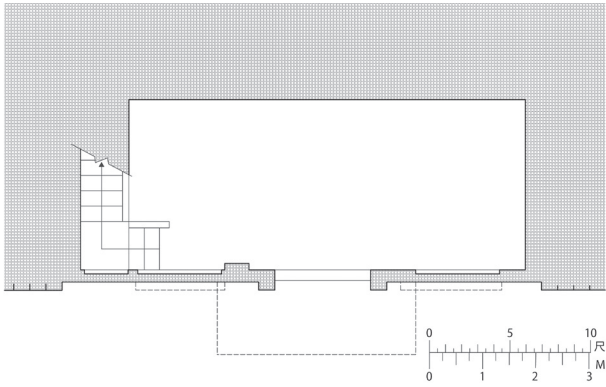


図 21 新化神社の地下神殿平面図

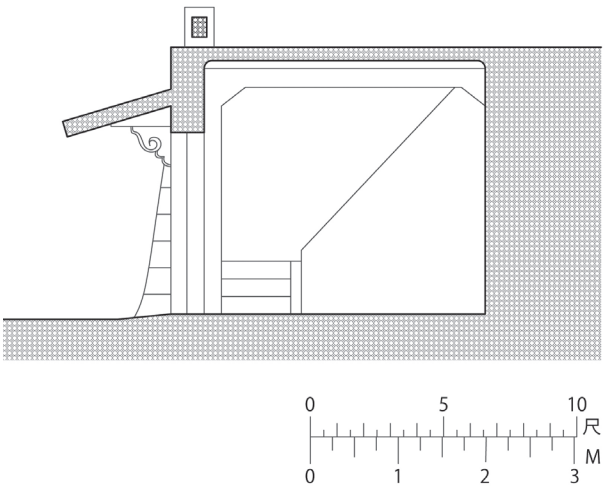


図 22 新化神社の地下神殿断面図

建国神廟は、皇帝溥儀が天照大神を祀るために帝宮内に建てた、日本における賢所ないしは伊勢神宮に相当する満洲国の宗廟である。昭和 15 年 7 月に創設され、昭和 20 年に廃絶した。社殿は南面する切妻造妻入の本殿と大きな切妻造平入拝殿を両下造の祝詞舎で繋いだ複合社殿であった。廃絶後の社殿跡地は、土に埋もれ、雑草が生い茂った状態であったが、2001 年に発掘・整備された。図 23 を見ると、右側よりに拝殿・祝詞舎・本殿と続く複合社殿の礎石および基壇が認められる。複合社殿の基壇の背後にはコンクリート製の壇状の塊とその両側に三角形断面の地面から突き出した角のようなものが確認できる。このコンクリートの壇状の塊が地下施設の一部であり、両側の三角形断面の角状のものが地下施設への階段を覆った出入口である。地下施設の一部は分厚いコンクリート板で覆われている。両側にある出入口には両脇に向かって扉が設けられている。発掘されるまでは地下施設は土に埋もれ出入口のみ顔を出した状態であったという。内部は、許可され



図 23 旧満洲国建国神廟基壇・礎石と背後の地下神殿

人が立つ直ぐ先の三角形断面の工作物と対称な位置に立つふたつが出入口、その間に地下神殿を覆うコンクリートが見える。本来は出入口のみ残し土で覆われていた。

なかったため、調査できなかったが、御神体等を格納する地下施設であることは間違いなからう。

もうひとつの事例は南京神社である。南京は南京神社創設時には、汪兆銘政権の首都であり、日本の派遣軍総司令部の地でもあった。南京神社は昭和 17 年 10 月に設立許可が下りている。天照大神・明治天皇・国魂大神を祭神として、南京城内西北に位置する丘陵地の五台山に造られた。社殿造営は奈良の宮大工仲 徳次郎氏が軍属として現地に派遣され建設に当たられた。そのため仲家に南京神社などの造営図面が残されており、社殿の様相がよくわかる。その上、内部は大改造されてはいるものの旧拝殿・幣殿と社務所が現存している。この南京神社においても地下施設が造られていたことを確認した。今も残る旧拝殿に至る南北に走る参道の右側、拝殿直前の樹木が植えられた土壇状の一面の地下に地下施設が確認できた。この一面の南側の地は一段下がっており、その間の崖面に口を開くように地下施設が配されている。また地表面から突き出すように換気穴が造られておりそれからも地下施設を確認することができるが、内部は残念ながら未確認である。一方、地下施設と直接関係することではないが、地下施設が埋まる土壇には注目すべき石柱が立っている。石柱には刻銘があり「国民政府主席、蔣中正手植」とある。どの樹木なのかは不明だが、蔣介石お手植えの樹木を記念するための石柱である。戦後の中国共産党政権下で壊されずに残されていることに驚かざるを得ない。





図 24 南京神社社殿前にある地下神殿の上部を含む土壇  
手前が蒋介石手植えを示す石柱、その先に地下神殿の換気口が見える。左に見える石は石燈籠の残存する部位。

台湾神宮遷座予定地、新化神社、満洲国建国神廟、南京神社に地下施設が造られていたことを確認してきた。しかし、神社時代当時の「台湾神宮御造営」など公式の文献にはこれら地下施設については触れられることはなく、むしろ触れることを避けているかのようにみえる。ただ、戦後まもなくの資料ではあるが、南洋神社に関する記述の中に地下施設について言及した事例がある。その事例を紹介する前に、簡単に南洋神社について触れておこう。南洋神社は南洋群島パラオ諸島コロール島アルミズ高地にあった官幣大社である。天照大神を祭神として、昭和 15 年 11 月 1 日に創立され、敗戦に伴って廃絶した。南洋神社の宮司別所檜一が引き揚げ後に神社の顛末を報告したものが、「官幣大社南洋神社奉仕ノ顛末報告書<sup>(27)</sup>」である。この中で、文献資料としては唯一地下施設に触れた箇所がある。関係箇所を以下に引用してみよう。

「昭和十九年三月三十日、敵艦載機ノ来襲アルヤ、直二本殿直後に特設サレタル、非常特別神殿ニ御神体ヲ奉遷ス。爾後の祭祀ハ依然本殿前ノ常ノ場所ニ於テ執行、其後昼夜敵機ノ来襲次第ニ熾烈ノ度ヲ加ヘ来タル以テ、南洋廳、照集団司令部ノ格別ナル協力ヲ得テ、万一ノ場合ヲ考慮シ、本島大和村ニ仮殿ヲ御造営中」

すなわち米軍の艦載機による攻撃を受け、直ちに本殿の背後に特設されていた「非常特別神殿」に御神体を移したとある。また、『神社本廳十年史』の本文中にも「空襲下において非常特別神殿を急設」とあり、空襲下に急遽防空施設としての「非常特別

神殿」が造られたことがわかる。<sup>(28)</sup> いずれにせよ、遺構で確認できた地下施設が、戦後の資料であるとはいえ文献上でも確認することができた。それら地下施設は本殿の背後に造られることが多く、御神体を奉遷後も本殿前で従来通り祭祠を執行できるよう配慮されたもので、南洋神社においても御神体奉遷後も従来の場所で祭祠が執行されたようである。<sup>(29)</sup> これらの事実からみて、これらの地下施設は非常時のもの、特別のものとはいえ、御神体を安置する場所であり地下神殿と称してよいのではないかと判断される。

## おわりに

昭和 10 年 7 月に台湾総督府部内において造替・境内拡張の方針が内部決定され、台湾神社の昭和造替計画は動き出す。当初は皇紀 2600 年記念事業として進められたが、遷座の当否、遷座地の背面の地滑り、戦局の情勢が思わしくないなどで工事は遅れに遅れた。それでも昭和 19 年秋にほぼ完成にこぎつけた。昭和 19 年 6 月 17 日に台湾神宮と改称、天照大神を中心的祭神として増祀することが公表された。ところが新社殿完成を期して行われる予定だった増祀祭の 2 日前の 10 月 23 日夕刻、新社殿は航空機事故によって大破する。増祀祭は旧社殿において実施され、晴れて天照大神を中心的祭神とする台湾神宮となったが、遷座は行うことができず旧社殿を継続使用していた。そして敗戦となり神社は機能停止となり、昭和 20 年 11 月 17 日に正規に廃止された。昭和造替については以上のような検証を行った。さらに戦後の跡地についても、古写真・空中写真・古地図を中心に変容過程を検討した。その結果、空中写真・地形図を時系列に追っていくとともに、現存する筋堀などの遺構を基準に台湾神宮予定地に一時期造られた幻の新社殿位置をほぼ確定することができた。

台湾神宮予定地に造られていた地下神殿について実態を明らかにし、同様な地下神殿の事例を提示した。今回確認できた地下神殿はいずれも昭和 15 年以降に造られている。また、本殿後方の地下に造る

ことが多く、御神体奉遷後も祭祀を通常通りつづけ  
るといふもくろみで造られたようである。

【注】

- (1) 津田良樹、「台湾神社から台湾神宮へ—台湾神社昭和造替の経過とその結果の検討—」（『年報 非文字資料研究』第8号、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、2012年3月）
- (2) 大倉三郎、「台湾神宮御造営」（『台湾地方行政』1-10、昭和19年10月28日・『台湾時報』昭和19年10月号）や八坂志賀助、「台湾神社御造営に就て」（『台湾建築会誌』、昭和18年10月）などの台湾総督府の内部関係者が後に書いた資料によると昭和10年7月に内部決定が行われていたようだ。
- (3) 『大阪時事新報』（昭和10年10月10日付）「北白川宮殿下の英霊を奉祀する官幣大社台湾神宮は明治三十三年御造営以来既に三十数年の歳月を経て社殿の損傷著しく、また狹隘を感ずるに至ったので台湾総督府では皇紀二千六百年記念事業として総工費約二百万円を投じ昭和十二年から四箇年継続事業として、社殿の大改築を行ふこととなった。なほ社殿改築の暁は社名も台湾神宮と改め、皇祖及び明治天皇の御神霊も併せて奉祀の様である。」
- (4) 『朝日新聞』（昭和19年10月24日付）には「一部を焼失せり」とあるが、1945年版空中写真の様子を見ると一部焼失ではなく大破したことが明らかである。情報統制下のため過小評価したのであろう。
- (5) 「官幣大社台湾神社祭神増祀並ニ神社名改称ノ件  
右謹テ裁可ヲ仰ク  
昭和十九年六月十三日  
内閣総理大臣東條英機  
内甲第一七三號昭和十九年六月十三日  
内閣書記官㊟
- 内閣総理大臣（花押） 内閣書記官長（花押）  
別紙内務大臣上奏官幣大社台湾神社祭神増祀並ニ神社名改称ノ件ハ至当ノ儀ト認メラルルニ付上奏ヲ経テ左ノ通指令相成然ルベシ  
追テ本件御裁可ノ上ハ来ル六月十七日仰出サルコトト致度  
指令案  
官幣大社台湾神社祭神増祀並ニ神社名改称ノ件上奏ヲ経タリ  
上奏書  
（略） 」（『公文類聚』国立公文書館）
- (6) 明治天皇が増祀されなかった理由は不明である。
- (7) 台湾報道写真協会編輯、「台湾神宮増祀祭」（『台新』1巻13号、台湾新報社、昭和19年）
- (8) 『第三十七回営業報告書』（昭和20年1月、台湾石材株式会社）  
一、「事業状況  
大東亜戦争モ愈々決戦期ニ入り国内体制モ皆戦力増強ノ一点ニ集中セラレ之レニ関スル諸規則モ次々ニ公布アリソレガ為メ一般建築業界モ特殊関係以外ハ殆ンド休止ノ状態ナリ  
本期事業状況ハ前年来繰越セル台湾神宮石工事、台北市供給砂石及二、三特殊工事ノ施工ニ依リ収入ニ於テ前期以上ニ上リシモ労力並ニ運搬力不足等ノ為メ工事遅延シ自然工費多額ニ昇リ此間臨時急施ヲ要スル受注引受ノ余力ナク不得已謝絶ノ余儀ナキコトナリ新旧工事ノ調節不可能ナリシト十月ニハ台湾神宮新社殿炎上ノ不幸アリ同請負工事モ一時中止打切ト決定セラルル等経営上ノ苦痛容易ナラズ其ノ結果所期ノ成績ヲ挙グルニ至ラザリシハ甚ダ遺憾トスルトコロナリ尚ホ来期ハ一層緊迫状勢トナルベク豫想セラルルモ情勢ノ変転ニ応ジ適当ニ善処セントス」（国立公文書館アジア歴史資料センター）
- (9) 台湾総督府警務局防空課、『昭和二十年五月中、台湾空襲状況集計』（国立公文書館アジア歴史資料センター）
- (10) 朝日新聞の昭和20年5月8日付。
- (11) 「樺太、朝鮮及台湾ニ於ケル官国幣社廃止ノ件  
右謹テ裁可ヲ仰ク  
昭和二十年十一月十七日  
内閣総理大臣男爵幣原喜重郎  
内甲一六三號、起案、昭和二十年十一月十七日、施行、昭和二十年十一月十七日指令  
内閣書記官㊟
- 内閣総理大臣（花押） 内閣書記官長 ㊟  
別紙内務大臣上奏樺太、朝鮮及台湾ニ於ケル官国幣社廃止ノ件ハ同大臣上奏ノ通廃止ノ儀御聴許相仰候様奏請相成然ルベシ  
指令案  
樺太、朝鮮及台湾ニ於ケル官国幣社廃止ノ件上裁ヲ経タリ 」（『公文類聚』、国立公文書館）
- (12) 黄溪海、『圓山の物語』（永業出版社、2004年）
- (13) 「圓山の歴史」圓山大飯店のホームページによる。



- (14) 以下、本稿で使用する空中写真、地形図はいずれも、台北市都市發展局が Web 上に公開している『台北市歴史図資展示系統』のデータを使用した。
- (15) 『官幣大社台湾神社境内之図』（官幣大社台湾神社社務所、明治 39 年 6 月発行、大正 11 年 1 月増補再版）
- (16) 神楽殿は大正 14 年 6 月の竣成であるが、位置は必ずしも明確ではない。しかし、台湾神社社務所『台湾神社写真帳』（昭和 6 年 10 月）には「御滞在所」と「神饌所」の間に写真および説明文が収録されている。また、写真に写された神楽殿は唐破風付の式台を持った建物で、神楽殿らしき建物が、1945 年版空中写真において「御滞在所」に正対した参道西側に確認できる。
- (17) 手水舎は当初「御滞在所」に正対した参道西側にあったが、その後移転されたようだ。元は木造であったが、蟻害のため基礎工事および柱を花崗岩に改変された。『台湾神社写真帳』の同頁に「社頭全景」とともに収録されており、「社頭全景」写真の一之鳥居すぐ奥の西寄りにも手水舎が写っている。
- (18) 造営計画配置図によると手水舎は回廊に接続して配されているが、1945 年版空中写真によると南神門の前方西側に独立した手水舎の痕跡らしいものを確認することができる。
- (19) 前掲注 (2) 論文（「台湾神宮御造営」）
- (20) 「台湾神宮御造営」によると、屋根葺材は当初銅版の計画であったが、入手難のために 1 期工事では桧皮葺に変更。2 期工事では桧皮も入手難になり、柿葺に塗料を施すことになったとある。
- (21) 山内泰明『神社建築』（神社新報社、昭和 42 年 8 月）によると「台湾では神明造の台湾神宮を曲線形式の大陸的な巨大スケールで改築して、そこに御遷座しようとした前日、その楼門に飛行機が接触して瞬時にして焼失してしまった」とある。
- (22) 前掲注 (13) に同じ。
- (23) 前掲注 (14) の『台北市歴史図資展示系統』に公開された空中写真・地図は新旧の写真・地図が同位置に重ねて表示できるような機能も有している。しかし、誤差が大きく今回の検討に使えるほど、精度の高いものではない。
- (24) 『昭和四年版 新化郡概要』（新化郡役所）
- (25) 「新化神社木造始祭を執行」（『敬慎』、昭和 17 年 12 月）
- (26) 「台湾における神社一覽」蔡錦堂、『日本帝国主義下台湾の宗教政策』（同成社、1995 年）
- (27) 「官幣大社南洋神社奉仕ノ顛末報告書」は『神社本廳十年史』（神社本廳、昭和 31 年 5 月）に収録されたものによる。
- (28) 『神社本廳十年史』（神社本廳、昭和 31 年 5 月）
- (29) 海外神社だけではなく、国内の神社においても地下施設は造られたようだ。宮崎神宮の場合は「御本殿後方に地下の御神体奉安所をつくり、祭典はあくまで従来通りつづけようといふものであった」（『神武天皇論 宮崎神宮史』（神社新報社、昭和 59 年 10 月）

#### 補注)

本稿脱稿後に、角南隆、『神社の防災防空施設』（京文社、昭和 19 年 5 月）を入手した。角南隆は内務省神社局の技師で、神社営繕行政の中心人物であり、台湾神社の昭和造替の基本設計も行っている。その角南隆の『神社の防災防空施設』によると、角南は神社の空襲対策として、御神体・御霊代の防空施設として「儲殿」と称する地下施設を設けることを提案している。「儲殿」については、「御祭りし安い、拝み安いところに御奉遷することが最も望ましい」とし、「また御霊代が御待避相成るのだといふ感じも表はしたくない」ということから、「理想的に云へば儲殿の位置は本殿裏で、透塀内の敵当な所に設けられることが最も好い方法ではないか」としている。さらに、「本殿の後に山があれば、山の中へ隧道の形式で設けるのが一番完全である」、「本殿裏が単に平地であれば地下に構造するより外はない」とし、造営例の参考図も添えている。そのほか「外壁の出入口は爆風に対しても、壊された場合にも二箇処あることが必要」、「出来るならば廊下の形を採って（廊下は曲る方が好い）、その両端に外壁の出入口を設け、廊下の中央の側壁に神殿がある様に配置するのが好い」などとしている。角南の見解に従えば、台湾神宮予定地に造営された地下施設は理想的な「儲殿」であるようだ。本殿背後が平地である事例が建国神廟の場合であろうか。角南は地下施設を「儲殿」と称し、そのなかに神殿を設け、神殿内に御神体・御霊代を納めるように考えているようだ。この場合の神殿は小さな宮殿のようなものであろう。「儲」は控えとか副という意味であるから、「儲殿」はサブの本殿ということであろう。角南の考えを踏まえた上でも、台湾神宮予定地に造られた地下施設はその中に納めるべき宮殿のようなものも含めて、「地下神殿」として無理はないと思われる。